

図画工作科教育法における描画活動についての教育実践報告

佐藤 有紀

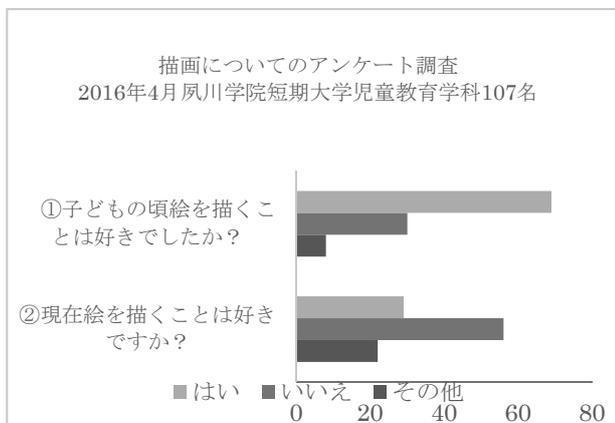
SATO Yuki

近年、本学の造形表現の授業での学生の活動の様子をみていると絵を描くことに対する苦手意識を持つ学生が増えている印象を受ける。描画活動に対する苦手意識を解放し、自由な表現を引き出すためにはどうすればよいか。これは筆者にとって、またこれから子どもと造形活動を行う学生にとっての課題である。今回筆者の担当している図画工作教育法の絵画表現の分野では描画に対しての苦手意識が生まれる理由を探りながら、「子どもの自由で豊かな表現活動を引き出すためにはどうしたらよいか」ということをテーマに模擬授業の実践を行った。本稿ではこの描画活動の模擬授業を振り返り、指導者に必要な子どもの表現に対する視点や指導の方法について考察する。

キーワード：苦手意識 表現 導入 鑑賞

1. はじめに

本学の図画工作科教育法の科目は2学年の前期に設定されている。筆者はこの科目の他に保育内容・造形表現や図工演習の指導を担当しているが、近年、造形活動（特に絵画表現）に苦手意識を持つ学生が増加している傾向を感じている。そこで、保育内容・造形表現 I、ii の第1回目の授業において、描画についてのアンケート調査を行った。調査対象者は、受講生である1，2年生107名である。調査内容および調査結果は、以下のとおりである。



問①：子どものころ絵を描くことが好きでしたか？

答え：はい→69 いいえ→30 その他→

問②：現在、絵を描くことが好きですか？

答え：はい→29 いいえ→56 その他→22

このアンケートによると、子どものころ絵を描くことが好きだった学生は半数以上であったが現在は三割以下に減り、現在は半数以上が苦手と感じているということがわかった。アンケートではそれぞれの答えの理由も聞いているが、①子どもの頃②現在、に共通して、苦手と感じている理由の多くは「下手だから」であった。また、「アイデアが浮かばない」「描くものが思いつかない」「頭に浮かんだことが上手く表現できない」「模写の方が好き」など、自由に表現活動に対して抵抗を感じる意見も多かった。また「好き」と答えた理由は、「自由に描けるから」「自分の世界に入ってゆけるから」、現在でも「描くことが楽しい」という活動することそのものの楽しさを挙げている意見もあったが、その他に他者の目を気にした意見が多いことが分かった。例えば子どもの頃であれば、「ほめられてうれしかった」「飾ってもらえてうれしかった」などである。また現在は自分の表現を楽しむということよりは「模写のほうが好き」「アニメのキャラクターが描きたい」など予めか

たちの決められたものをそのまま上手に描くことに達成感を感じている印象がある。また好きだが下手という回答も多くみられ、表現活動に対する自己肯定感が不足していることを感じる。

今年度の図画工作科教育法の絵画表現の授業ではこれら学生の傾向をふまえ、学生とその問題を共有し自由な表現を引き出すためにはどうすればよいかということテーマに授業の計画を立て実践した。本稿ではその描画についての模擬授業を振り返り、図画工作の授業における造形指導のあり方について考察する。

2. 方法

調査期間：平成28年5月9日～8月2日

調査対象：夙川学院短期大学児童教育学科「図画工作科教育法」受講生26名

受講生の半数は前期授業の間に小学校教育実習に参加、またほとんどの学生は幼稚園、保育園実習を経験している。

3. 授業の展開

3.1 図画工作科教育法について

本授業のスケジュールは以下のとおりである。

1. ガイダンス
2. 美術教育の歴史
3. 美術教育の意義と教科の目標・学年の概観と領域内容について
4. 教材研究① 絵画表現
5. 教材研究② 絵画表現
6. 指導計画作成について
7. 教材研究③ デザイン表現
8. 教材研究④ 立体表現
7. 指導案作成①
8. 指導案作成②
9. 指導案作成と模擬授業（平面の表現）
10. 指導案作成と模擬授業（平面の表現）
11. 指導案作成と模擬授業（立体の表現）
12. 指導案作成と模擬授業（立体の表現）
13. 指導案作成と模擬授業（造形あそび）
14. 鑑賞教育について
15. まとめ

15回の授業の前半は図画工作科教育法の指導要領に基づく主な基礎的技法の実践演習、後半は指導案の作成と模擬授業の演習である。

3.2 模擬授業について

26名の受講生を5つのグループに分け、毎回1グループが教師役となりそれぞれ違う表現分野の授業を行う。

- 1班：平面の表現（絵画）
- 2班：平面の表現（版画）
- 3班：立体の表現（粘土）
- 4班：立体の表現（段ボール）
- 5班：造形あそび

模擬授業を行うにあたり、クラスの雰囲気や事前にとらえることができるように、受講生全員で小学3、4年生のころを振り返り、以下の質問について自己紹介を行った。

- ・図画工作について
- ・好きな教科
- ・子どものころの長所、短所

その結果、今回の受講生のうち、図画工作が得意で好きだったという学生は受講クラス全体の1割程度で、1章のアンケート結果よりもさらに子どものころに絵を描くことが苦手な学生の割合が多く、図画工作よりも身体を動かすことや体育が好きだったという意見が多かった。また、自分の子どものころの長所を明るい、元気、よくしゃべる、よく笑うなど、活発な傾向を挙げている学生が大多数で、マイペースな性格を長所ととらえている学生もみられた。短所はうるさい、自分中心、能天気、わがままや落ち着きがないという意見が多かった。これらの結果をもとに、模擬授業を行うクラスの傾向を考慮しながら授業のねらいを考え、班ごとに自分たちの授業を計画する。

3.3 模擬授業の実践（1班：絵画表現：テーマ人物）

模擬授業を行う前の調査で、図画工作の中でも特に絵を描くことに苦手意識を持つ子どもが多いことがわかっているため、「絵を描くことに抵抗がある子どもたちにどんな課題を与えたら興味をひくことができるか」ということを考えながら、班で話し合い授業のねらいや内容を決めていく。以下は学生による

模擬授業の内容である。

○題材名： 友達になりきってみよう

○題材の目標： にらめっこをしたり、相手の顔に触れたりすることで顔に対する関心や子ども同士の親しみを深める。さらに「変な顔」を描くことで人物描写への苦手意識を軽減する。

○評価基準

- ・造形への関心・意欲・態度
クラスの友達同士で向き合い友達の顔を描くことに興味をもち新たな発見を表現することを楽しんでいる。
- ・発想や構成の能力
自分の表現意図に合わせて色づくりや色の配置を考えて描くことができる
- ・創造的な技能
自分の表現意図に合わせて材料や用具の特徴を生かして表し方を工夫して表現することができる
- ・鑑賞の能力
自分が感じたことを話したり友達の考えを聴いたりしながら作品の良さ、面白さ、表現の工夫を捉えることができる。

○授業の内容

- <導入> 友だちとにらめっこあそびをして、いろいろな顔をつくり互いの表情を観察する。
- <展開> 面白い表情をとらえて、よく観察して描く。
- <鑑賞>
描いた絵をお面にして身につけ、描いた友達になりきってみる。

○材料： 八つ切り画用紙 ・ えんぴつ・ペン・水彩絵具

以下に具体的な授業の流れを説明する。



(先生役の学生による授業の説明)

1. 教師役の学生が本授業のねらいを板書し、授業の内容を子ども役の学生に説明する。内容「友達の顔を描く」ということだが、ねらいは普段から仲の良い友だちの顔をよく見て新しい発見を楽しむことだということを伝える。
2. 導入：教師の提案から子ども役の学生は二人組になり友だちとにらめっこあそびをする。この遊びの中で色々な表情を見つける。



(導入 にらめっこあそび)

3. 展開：あそびで見つけた友だちの面白い表情(変顔)を交互によく観察しながら八つ切り画用紙に鉛筆で下描きする。着色は自分の好きな画材を使う。先生役の学生は画材や技法についての相談にのり、それぞれの子どもの学生に合った声かけをする。
(絵の具を使う子どものために混色の見本を掲示)



(作業風景)



(完成作品)

4. 鑑賞：描いた友だちの顔を切り取り、お面をつくる。それを被って友達になりきり、互いに見合ったり、写真を撮ったりして遊び鑑賞する。



(作品を身につけて鑑賞しよう)

3.4 模擬授業を終えて

今回の図画工作科教育法の授業では、模擬授業後、担当教員との合評の他に子ども役の学生が授業の内容と指導についての感想を、先生役の学生はと模擬授業全体の感想を書き、振り返りを行った。以下は児童役、教師役それぞれの学生の感想である

○児童役感想：抜粋（原文）

<授業内容について>

- ・はじめのにらめっこ導入がとても楽しく、良かったと思いました。
- ・最初から見つめ合うのは恥ずかしいので、にらめっこをしたのがよかった。
- ・にらめっこをすることによって絵を描く友達となれ親むことができましたと思います。
- ・ペアの子の顔をよく見てかいたので、こんなところにホクロがあったんやとか改めて発見することができました。にらめっこは久しぶりだったので少し恥ずかしかったけど楽しかったです。
- ・近くでいつもと違った表情を見ることができてお互いに笑いながら楽しくできたのでとても良かったです。
- ・特徴をつかんで描けた。
- ・人の顔を描くのは小学生以来はじめて人の顔を描いたけど楽しかった。
- ・皆で楽しみながらできたので苦手な子でも楽しみながらできると思った。
- ・もっと人の顔をうまくかけるになりたい
- ・絵画で人物を描くのが一番嫌いだったが、変顔を友達と描くと楽しかった。

<指導について>

- ・先生たちは常に周って声をかけたりほめたりしていたのが

- よかった。
- ・準備するものがそろっていなかったの、皆、伝達不足だった。（先生役も生徒役も）
 - ・声かけで結構モチベーションが上がるので気持ち的にもすごく良かった。
 - ・先生がたくさんぐるぐる回ってくれて全部の先生が何度も「ここが似ている」と具体的に言ってくれて嬉しかったし自信になった。

○教師役感想

<良くできた点>

- ・にらめっこを取り入れて顔をよく見るようにできたと思う。一人ひとりに言葉がけができた。
- ・にらめっこや表情豊かな顔をしてから（変顔あそび）取り組むことで描くことに対する抵抗を少し軽減できた点

<改善点>

- ・色作りの表は時間をかけてつくるべき
- ・色の塗り方について説明をすればよかった。黒を先に塗って困っている人がいた
下描きを鉛筆ではなくフェルトペンを用いればよかった。
- ・時間が短かったので児童が満足に描くことができていなかったのももう少し時間を長くすればよかった
- ・描く時間が長くて、お面をつくるができなかったのが残念だった。
お面を作って足りるのが一番大切だと思いました。

<感想>

- ・5人でやったことで様々な意見を出し合うことができて良かったです。
- ・苦手な子がいるからこそどのようにしたらその気持ちを軽減できるかが大切であることを改めて実感しました。
- ・指導案をきっちり考えてイメージすればするほど、ちゃんとできることが分かってきました。
その場で考えることはだめだなと思いました
- ・人の顔をしっかりみて描く機会はかなり少ないと思うので、久々に皆が一生懸命描いている姿がとてもよかったと感じました。
- ・導入は本題の向けての大切なものなので子どもたちが楽しんで興味もてるようなものをしていかないといけないなと思いました。
- ・どうしても4、5歳児とかかわるような対応になったり、大学生へのかかわり方になったりしてしまいましたが、楽しい授業にすることができました。しかし描いている絵を具体的に、ほめたりする言葉をえらぶことは難しく「上手」という言葉ばかり使ってしまいました。もっと子どもが自信をつくような言葉がけができるようになりたいです。

- ・（生徒役の学生の）授業の感想をよんで、題材も目標が相手に伝わっていたので指導案を立てる意義を改めて感じました。改善点はまだまだたくさんあり、また本当の子どもたちがどんな反応をするかわかりませんが、9月の実習に向けてのイメージ作りをすることができました。

これらの感想から、子ども役の学生は導入のにらめっこあそびから本活動に入ったことで描画を楽しむことができたと感じたこと、教師の声かけが励みになったことがわかる。また、教師役の学生も授業のねらいが児童役の学生に伝わり楽しい授業をつくることができたことを感じている。問題点としては素材の準備不足やその活用法、技術的なことの説明不足をあげていた。また、子どもに対する言葉がけの難しさも感じている。

4. 考察

前章の模擬授業（絵画表現）では、描画活動の中にあそびの要素を取り入れることによって絵を描くことに抵抗のある学生も周囲と色々なことばを掛け合いながら楽しそうに活動に取り組む様子がみられた。本人たちの感想にもあるように材料の準備不足や時間の配分に問題はあったが、計画したねらいのとおり、子ども役の学生が皆、実物の顔そのものに興味をもち、生き生きとした描画活動に集中して取り組むことができる場をつくることができていた。教師役の学生は、子ども役の言葉や態度に丁寧に対応して、「自由に表現してもいい。」という安心感を与える環境を作っていた。この授業の受講生のほとんどが、保育の専門教育科目を専攻しており、幼稚園、保育園の実習を経験しているため、子どもに寄り添った視点で活動を視るという力がついているのを改めて感じた。ただ子どもの表現活動に対して「上手」「かわいい」といった言葉で、とにかく誉めてやる気を引き出すという傾向がどの模擬授業でもみられた。自分の表現に満足するためにはもちろん周りの反応も必要ではあるが、「ほめられる」という認証がなければ活動に意味が見いだせないということになれば、本来の造形活動の楽しさを感じることはできなくなってしまうであろう。

5. まとめ

新学習指導要領による図画工作科の教科目標は「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な基礎活動の能力を培い、豊かな情操を養う」とされている。平成 20 年の改訂版で、基礎的な能力を「育て」が「培い」にされたのは児童が表現及び鑑賞の活動を通して、その能力を自ら耕し伸ばしていくことを明確にするためである。

子どもの能動的な学びを引き出すために必要なことは「褒められたい」という外的要因ではなく、「その活動をしたい、学びたい」という内的要因である。その内的要因を育む環境をつくることができれば、冒頭の苦手意識についての問題も解決できるであろう。

子どもの意思を尊重し造形活動を存分に楽しみながらそれぞれの能力をのばして達成感を味わうことができる場をつくるには、指導者が基礎的技術を身に付け子どもたちに指導できることに加え、それぞれの作品のよさや美しさを受け取ることのできる力が必要である。

6. 今後の課題

今回の図画工作科教育法の実践では改めて指導者が常に相手（子ども・学生）のことをとらえ互いに協同しながら授業を作っていくことが大切であることを実感した。造形活動の指導というと技法の伝授というイメージがあるが、今後の図画工作の教育法の授業ではさらに「観る力」を養うということに重点を置き、造形素材の研究、作品鑑賞の活動に力を入れていきたい。

参考文献：

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説「図画工作編」』
 日本文教出版（2008）
 大学美術指導法研究会『平成 20 年告示新学習指導要領による「図画工作科」指導法』大学美術指導法研究会 藤江充・岩崎由紀夫・水島尚喜 編著
 日本文教出版（2009）

ピアスーパーバイザーからのコメント

この図画工作科教育法の実践報告は、特に図工が苦手な学生にとって有益な授業であったことが窺われます。たとえ図工に対する苦手意識があったとしても、子どもの表現に寄り添い、その感性を育てていくことが、教師の役目ではないでしょうか。

子どもの図工指導に関して、教員養成や児童教育に携わる方々に、本報告の知見を幅広く共有して頂ければと思います。

（担当：園田 雪恵）